序　　文

阿波学会会長　石　井　愃　義

昨年７月26日から８月４日まで行われた相生町の総合学術調査は、本学会の調査期間中としては、珍しいほどの悪天候に見舞われ、特に野外調査を行う各班にとっては大きな打撃であったが、調査期間を変更するなどによって、また年間を通しての調査を行う班もあるので、無事に調査を全うすることができ、22班が参加した調査の成果がこの紀要にまとめられた。

急傾斜地の多い山地を縫うように流れる那賀川およびその支流に沿って、点々と開けた居住地を連ねる相生町は、江戸時代に「仁宇谷一揆」と呼ばれる事件が２度までも起こった地域である。しかも、完全ではないが、２回とも住民の要求は達成されている。当時、耕地は狭く、住民の数は少なかったに違いない。そのような地域に住んでいた人たちはどのような生活をし、何を考え、どのような足跡を残して来たのか。またそれらが現在の相生町にどう反映されているのであろうか。「相生町の文化」といえば、個人的には「阿波番茶」以外は詳細を知らず、意外にも用水が発達しているのを見ていた程度であったので、大変興味があるところであった。また、この地域の山林の人工林化はそう古く始まったものではないが、それにしては予想をはるかに越えて人工林が多くを占め、自然林は社叢など以外にはほとんど残っていないのにも驚かされる。それが生物相等にどのような影響を与えているのか、これもまた非常に興味のあるところであった。

ここで得られた調査結果を今後どのように活用して行くかは、相生町民にだけでなく、調査に当たった側にも投げかけられる宿題になろう。いうまでもないが、今回の調査で、相生町のことがすべて明らかになったわけではない。どうしても調査員の数等にも限りがあるので、調査はすべての面で出来るわけではない。終わってみれば、あれも調査したかった、これも知りたかった、という事が多数出て来る。この調査をきっかけに、さらなる調査が行われ、この地域についてのより深い知識が得られるようになることを願っている。

最後になったが、調査に当たって種々のお世話になった町の担当者を始め、町民の方々に心から御礼を申し上げる。ここに示された調査成果を、相生町の発展につないでいただければ、調査員を始めとする阿波学会関係者にとって望外の喜びである。